
勇者と魔王SS ~ 活動報告小話集 2 ~

ゆずはらしの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者と魔王SS（活動報告小話集2）

【Nコード】

N1044BA

【作者名】

ゆずはらしの

【あらすじ】

2012年度、新年の福袋的小話集。活動報告と、ブログ、アトリエゆずはらでちよこちよこ書いていたSS。

基本的におバカさんな話。

警告タグの「残酷な描写あり」が一瞬、「残念な描写あり」に見えた。それだったら堂々とするだけだな。

唐突に。

目の前には、超絶美形。

漆黒の髪に深紅の瞳、着る人を選ぶだろうデコラティブな衣装を
あつさりと着こなし、気品すら漂わせている。うわ、足長っ。腰の
位置、高っ。

ごてごて飾りがついたマントをひるがえし、かつん、かつん、と
ブーツの音を響かせながら、階段を降りてくる。なんの番組。なん
の映画。似合いですぎだろう。決まりすぎてて厭味っばいぞ。

ちよっとアレだけどね。頭にねじくれた角あるけどね。背中に真
っ黒な羽あるけどね。触ったら痛そうな、爪が長く伸びてるけどね！

あたしの目の前まで来ると、超絶美形はにこりともせずにごちら
を睥睨し、言った。

「そなたがこたび、召喚されし勇者か……よくぞ、この城までたど
りついた」

「他力本願な王様始め、この世界の住人には、えらいメーワクした
わ」

伝説の聖剣とやらを構えながら、あたしは言った。

「フツの女子高生呼び出して、世界の為に働けて、何なわけ？
何様？ この世界の事は、この世界の人間がどうにかするもので
しょうが！

こんななまくら一本で、右も左もわからない人間を城からほうり出すって、やる気ないにも程があるでしょ〜！

国民死なせたらバツシングあるから、異世界から勇者呼び出して戦わせてるって、思い切り言いやがったわよ、あのクサレ王！」

それなりに美形だったが、やる気のなさが丸わかりの祝福をおざなりにされ、城から追い出された。予算もないとかで、持たされたものは、この聖剣の他には、服が一式と三日分の食糧だけ。

おかげで魔王城のある荒野にたどり着くまで、アルバイトをしなから食いつなぐしかなかった。

「皿洗いと踊り子が本業になりかけたわよ、おかげで！」

バレエを習っていて良かった。

「その境遇には同情するが……、ここまで来たという事は、吾と戦う意思ありと見て良いか」

「ああ、まあ、あんたには恨みはないけどね！ 変な首輪つけられちゃってさ、あんたと戦って倒さないと、あたしが死ぬらしいのよ」

あたしは自分の首を示した。クサレ王と腹黒神官があたしにつけた、黒い首輪がそこにあった。

魔王を倒すか、あたしが死ぬかしないと外れない。そして、一年の期限が過ぎると、自動的にあたしの首を絞めて命を奪う。

こんな、もろに呪いのアイテムで枷をつけないと安心できないなんて、どれだけ他の勇者に反逆されてきたんだ。その勇者たちの気持ちわかるけど！

「死にたくないから、ここまで来たわ」

逃げ出す事すらできないから。

魔王は、あたしを見つめ、ふうと息をついた。

「まこと、愚かしい行いを繰り返すな、人の国の王とその取り巻きは。」

哀れとは思うが、勇者よ。吾も殺されてやるわけにはゆかぬ」

「そうだろうね。あたしもこんな理由で殺しに来る人がいたら、全力で嫌がるし。でも、死にたくないからさ」

剣を構える。

「だから付き合ってよ、悪いけど。」

礼儀らしいから、名乗るわね。あたしは透子^{とおこ}。神山透子^{かみやまとおこ}。食べ歩
きが好きな、ただの女子高生……だった」

「トオ」

魔王は、不思議な発音だと言いたげに、あたしの名前を繰り返し

た。

「礼にのっとり、吾も名乗ろう。」

北の荒野、魔の一族を統べる王、

タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

時が止まった。

「……は？」

「タラチ・イアンデス・グロウガリアス」

もう一度、律儀に名乗ってくれた。なんかいい人だな魔王！ いやそれより。

「……………タラちゃんです？」

玲瓏たる声音と、麗しい発音で名乗られたその名は、

一般庶民で、この世界の言語の発音に慣れていないあたしの耳には、某国民的アニメの登場人物の名前にしか聞こえなかった。

こんなに美形なのに、タラちゃん！

魔王さまなのに、タラちゃん！

はこの名前はイクラちゃん、猫の名前はタマですか！ そうしてお魚くわえたドラ猫を、追いかけてりするんですかっ！！！

「えっと、あゝ……」

脳裏に走馬灯のように走る、元の世界のアニメの映像と主題歌。霧散しかけた気力をなんとかかき集め、あたしは剣を構え直すと、魔王に言った。

「お母さんの名前は、サザエですか！」

……でも、やっぱり混乱していたらしい。

* * *

ピンポイントでギャグが書きたくなって、書いてみました。

とりあえずこのあと、魔王さまは首輪を外してくれ、元の世界に帰る方法を探してください。

2011年11月27日 活動報告&アトリエゆずはら記事より

続きました。

ひよひよ、と、小鳥の声でした。

うららかな昼下がりに。

柔らかな芝生の上に、分厚いキルトの布を敷き、あたしは絶賛、ピクニック中だった。

「うをを、このチキン絶品！ ハニーマスタードがきいてる。こっちのサンドイッチも！ チーズとバジルのハーモニーが、まったりとして、しかししつこくなくっ」

「ミルクティーもあるぞ」

隣にいる魔王が、熱いお茶を注いでくれた。

「つくつく、五臓六腑ごぞうろくぶにしみ渡る……っ」

「それはどういう表現だ」

「端的に言うなら、うみゃい！」

「そうか。料理番に伝えておく。喜ぶだろう」

あたたかな日の光。おだやかな風。鳥の声。花の香り。

お茶を入れてくれる迫力美形。

そして、……美味しいごはん！

「やー、もう、幸せいっぱいですよ、タラちゃん」

「タラチ・イアンデスだ」

頭にねじれた角、背中に羽つきの迫力美形が言った。ティーポット片手に持ちながら。

「日本人の耳には『タラちゃんです』と聞こえるんですよ、タラちゃん。」

ちなみに『ちゃん』は親愛を意味する呼び掛けのようなものです」

「トオコは吾に、親愛を覚えているのか？ 吾は、人族の者が忌避する魔族の王ぞ？」

「あのクサレ王と腹黒神官に比べれば、天使のようですよ！ ごはん美味しいし、首輪はずしてくれました」

あたしはそう言うと、ミルクティーをもう一口飲んだ。

「正直言つて、この世界とは何の関係もないんですよ、あたし。なのにいきなり呼び出されて、勝手に首輪つけられて。」

戦つて魔王倒して来い、さもないと殺すなんて言われて、この世界の人間に義理とか信頼とか、もてるわけないでしょう」

「吾には持てるのか？」

「魔王陛下はあたしの命を救ってくれた。美味しいごはんもくれた。それに何より、」

あたしはぐっ、と拳を握った。

「タラちゃんなんて名前の人に、害意を持つのは難しいんですよ！
一般庶民な日本人としては！」

某イソノさん家のホームドラマ、おそるべし。子ども心にすりこまれた、「はい」や、「ちゃん」の一言や笑顔が、どうしても、どうしても、ど、う、し、て、も！

魔王さま見ると、くっきりと脳裏にフィードバック。だって、タラちゃんだし！

魔王なタラちゃんは、良くわからないという顔をした。

「良くわからぬが……、まあ。しばらくは、ここでのんびりするが良い。勇者一人ぐらい、養っても問題はないゆえな」

「ありがとうございます。あ、でも、役に立てそうなことあったら言つて。無駄飯喰らいはイヤだから。荒事以外でなら協力するし」

「心配するな。ごく普通のジョシコオセイとやらのそなたに、荒事なぞ頼んだりはせぬ。」

異世界人のそなたでもできそうな仕事なら、何かしら、あるだろう。執事のオルテスに頼んでおく」

「あざーっす！」

「それはどういう意味だ」

「ありがとうございます、の略」

「そうか。あざーっす？」

「いや、タラちゃん、そんな真面目な顔して言わないで。軽いノリで言っ言葉だから」

「ふむ？」

首をかしげて、魔王陛下は、あざーっす、とか、あざっす、とか、口の中でつぶやいている。迫力美形に言われると、ギャップがありすぎる。

「それにしても、本当なの？ お母さんの名前」

「む？ ああ。驚いたぞ、トオコに問われた時は」

「いや、まさかと思ったんだけど……」

「異界の勇者には、予知や透視などの能力があるのか？」

「や、あたしにはないです、そんな力。もしあるとすれば、原作者

の……ええっと。長谷川町子先生にじゃないですかね」

「ハセー・ガウ・アマーチカ？ 預言者か何かなのか」

「預言者というか……、あたしの住んでた日本という国で、多くの国民に多大な影響を及ぼした、マンガ家という職業の人です。

もう亡くなってますが、いまだに彼女の書いたものは読み継がれ、語り継がれています」

「そうか。芸術家は、預言者と似たところがある。偉大な人物だったのだな。

吾のみならず、母の名すら看破していたとは」

「初めて聞いた時は、冗談かと思ったよ……」

魔王タラチ・イアンデス・グロウガリアス。

日本人の耳には「タラちゃんです」と聞こえる名前を持つ母親の名は。

「サザエさんなんだもんなあ……」

迫力美形な魔王のお母さまは、迫力美人なきららしい女性だった。その女性に笑顔で、『サザエです』と名乗られた衝撃は、いまだ新しい。

「サジャー・エイデス・グロウガリアスだ」

「うん、やっぱ『サザエです』としか聞こえないわ」

長谷川町子は、偉大だった。

* * *

アトリエゆずはらの、拍手お礼として置いていたもの。なんだか続いてしまった。

意外でした。前編。

「ある意味、必然であると言えようのう」

迫力美女が言った。頭の角が、つややかにセクシー。いや。

「必然？」

「うむ。まあ、説明すると長くなるのだが」

大きな窓から差し込む光が、部屋中にゆったりと、陰影をつけている。

美しい調度品が、上品に配置されたサンルーム。

白と金でできたティーテーブルには、可愛らしいお菓子を盛った器と、ティーセット。

そうしてデコラティブでありながら、繊細かつ優美な椅子に腰かける、頭に角のある迫力美人。

現魔王の母君であらせられる、グロウガリアスの魔将。麗しき魔劍の女王。

「何が必然なんですか、サザエさん」

「サジャー・エイデスじゃ」

「サザエです、としか聞こえませんか……」

「まあ、人族の耳には、魔族の発音は難しかるうしのう」

鷹揚に笑いつつ、サゼエさんは、目の前の椅子を示した。

「まずは、座れ」

「いえ、あたしは使用人ですので」

「わらわが構わぬと言つておる。座れ」

迫力美人なサゼエさんに言われ、あたしはスカートのフリルを気にしながら、優美な曲線を描く椅子に腰かけた。

タラちゃんの口利きで、あたしは現在、メイドをしている。大変な事も多いけど、でも、それなりに充実している。平穏な日々があるのって、ありがたい。たまにちよつと、元の世界の事を思い出して悲しくはなる。でも、忙しく働いていれば、気もまぎれる。

それに……うれしいこともあった。お仕着せなんだけど、デザインが可愛いんだ、魔王城のメイド服！ 渡された時にはきゅーきゅー言つて喜んじやった。

ただ、たまにこつして、魔王さまや母君さまに、話し相手になれと言われるのが。ちよつと、気まずいと言つか。

と、思っていたら、合図をしたサゼエさんに、ささつと近寄る先輩メイドさん。そして素早く用意された、もう一脚のティーカップに注がれる紅茶。

こつりと目の前にカップを置かれ、あたしは青ざめた。

「そなたも飲むが良い」

「いえ、あたしは」
「飲め。一人で茶をたしなんでも、楽しくもなんともない」

サザエさんは微笑みながら、しかし逆らえない何かをかもしだしつつ、あたしに言った。うん。逆らえない。逆らったら何か、次元の彼方に飛ばされてしまいそうな気がする。

手にしたティーカップにしかし、あたしの緊張は倍増。

「なんじゃ。ミルクティーは嫌いかえ？」

「いえ、好きです。好きなんです、ちょっと緊張してしまいました」

「かわゆい事を言いおるのう」

ほほほほ、とサザエさんが優雅に笑う。あたしも強ばった笑顔になった。いや、ミルクティーは大好きだよ！でも、怖いんだって、このティーカップ！持ってるのが！

手にしたカップに視線を落とす。優雅な金色の持ち手がついた、藍色のカップ。

カップの形に削り出し、中をくり抜き、唇を当てる部分に違和感がないよう、磨き抜いた青金石^{ラピスラズリ}。

落としたら、それまで。薄く削った宝玉のカップは、ぱんつと砕けてしまうだろう。それほど繊細、そして匠の技を尽くした芸術品が、あっさりあたしの手の中に。

多いんだ、そういうの、魔王城。こないだも、ガラスだと思っていたら、水晶をくりぬいて造られたガラスでしたよ。それが何ダーも並んでましたよ、キッチンの棚！ お皿やボウルでも同じバージョンがありましたね！ 紅水晶を削って形を整えたお皿がとか、紫水晶のボウルとかね！ あの大きさのもの作るのに、どんだけの水晶の塊が必要だったんだ。磨けって言われたけど、手が震えましたよ、落としたらどうしようって思ってた！

そういうグラスやカップ、お皿やボウルで、飲み食いできる神経がわかりません、サザエさん……。

「人の王の愚劣な行いは、代々続いておるでなあ。そなたのような異世界の人間を誘拐しては、剣を持たせ、われらの領土に放り出す。かような間に合せのような勇者に倒されるわれらではないが、犯罪の片棒をかつがされるようだな。良い気分ではない」

恐る恐る、涙目になりつつ一口、ごくり。そうしていると、サザエさんが言った。

眉をひそめた顔でさえ美人。

「え、あ、間に合わせ、ですか？」

「で、あろう？ 本気でわれらをどうにかしたいのであれば、自国の魔力ある優秀な若者を鍛え、軍を作ったほうがまだ、可能性はある。だというに、剣を持つ術すら知らぬような異世界の人間をさらってきては、死にたくなくば戦って来いと……」

ああ。そうだよな。言われてみれば、間に合わせだよな。あたしも、武器なんて持ったことのない人間だったし。

「自分の国の民を使うと、王の評判が悪くなるから、異世界の人間を呼んでいる、と言われました……」

それに、そんな事も言っていた。考えてみれば、あたしはあの王と神官にとって、使い捨ての道具だったんだ。

胸が痛む。そんな理由であたしは、この世界に呼び出され。

向こうの世界を、向こうの世界であたしが持っていた、大切なものの全てを奪われた。

「トオコも災難であったな」

「いえ……あたしは。幸運でした。タラちゃんに、首輪はずしてもらったし。今もここで、働かせてもらってるし」

それでも、自分が幸運であったことはわかる。あのまま殺されても、おかしくはなかった。でも、生かされた。助けてもらった。

殺せと命じられた魔族の王に。

「トオコは、けなげよの」

サゼエさんが、ふと微笑んだ。うわう。綺麗。綺麗。美人！

「いいいいえ。けなげとかそんなんじゃない……、あう、えと、必然と
いうのは、それで？」

あまりの美しさに目がくらみそうになりつつ言つと、サザエさん
は、「そうであったな」と言つてうなずいた。

意外でした。前編。(後書き)

ラピスラズリや水晶くり抜きのカップやグラスは、実物を見たことがありません。

ロマノフ王朝か何かの美術展で、展示されていました。

本水晶の光り方って、ガラスとは違うんですね……それが無造作に、カットグラスの形でずらっと並んでいるのを見て、庶民なわたしは気分が悪くなりました。あれでお茶とか飲むって心臓に悪いよ……。

意外でした。中編。

「そなた、われらの名に親しみを覚えたであろう？」

サザエさんが言った。あたしは、ほえ？ と妙な声を上げた。

「なんじゃ。息子に言ったのであろう？ わらわと息子の名に対し

ては、敵対する思いを抱けない、親しみを覚えると」

「あゝ。まあ。言った……ね」

あれか。あのピクニックの時の発言か。

だって、タラちゃんと、サザエさんだもんなあ。

「ハッセ・ガウー・アマー ルチカは、偉大な人物であったようじゃ
な」

「長谷川町子先生です」

異世界発音されると、どこの人ですか、な感じだね。

「『いじわるばあさん』と、『サザエさん』が代表作で……」

「おお。それか。わらわの名に似ておるのう。サジャー・エッシャ
ン」

「や、『サザエさん』……えゝ、日本語で、自己紹介の時に、『で

す』とか、『でございます』とかいう言葉をつけてですね」

あのアニメ、確か、サザエでございます、って言ってなかったっけ。

「『サザエでございます』」

と、思ったら、優雅な笑みを浮かべた美女に言われた。……何!?

「うむ、必然じゃな」

「え、いや、いまの何ですか、サザエさん!」

「わらわの名を名乗っただけじゃ」

はい?

「え、確か、『サザエです』……」

「通り名はな。幼名も入れると、わらわの名は、

サジャー・エイデ・ゴウシャ・ザイ・マルスと言う」

「……」

すみません。

庶民な異世界人の耳には、『サザエでございます』としか、聞こ

えません。

「長いので、普段はサジャー・エイデスと名乗っておるが」

。正式名が『サザエでございます』で、短くしたのが『サザエです』。
うん。丁寧語だけ？ それが普通の言い方になってるよ。

「ああああの。それじゃ、タラちゃんにも別な名前が？」

「あれは、タラチ・イアンデスのままじゃ」

「さようですか……」

なんとなく、ほっとした。いや、別な名前があっても良いんだけどね!?

「ええっと、それで……何の話でしたっけ」

「必然の話じゃ」

「いかん。『サザエでございます』の衝撃が激しくて、忘れる所だった。」

「あ、はい。必然？」

「人の王の悪辣あくらつさにな、われらも辟易へきえきしたのじゃ」

ラピスラズリのティーカップを持ち上げ、優雅にサザエさんは、ミルクティーをすすった。

「したがのう。異世界からの客人は、われらの姿を見ただけで恐慌状態になる者もいてのう」

「あ、えーと……すみません」

確かに、角や翼のある姿は、予備知識なしに地球の人間が見たら……現代日本ではそれほどでもないけれど。時代によっては、恐怖にかられる人もいただろう。

魔族の人たちが悪いわけでもないのに。

「なぜ、トオコが謝るのじゃ」

「いえ、何だか……すみません」

「おかしな娘じゃのう」

ほほほ、とサザエさんは笑った。

「見慣れぬ姿の者を見れば、怯えるのは生き物の常ぞ。仕方がないわな。」

「したが、こちらの話も聞かず、武器を振り回し続けられてはのう。こちらも困るのじゃ。」

戦いたくも、傷つけたくもないのに、怪我をさせざるを得なくて

な。こちら最初は事情もわからず。起こらずとも良い悲劇が起きたりもしたわ」

「ああ……はい」

あたしはちよつと神妙な顔になった。あたしは幸運だった。でも。間に合わずに命を落とした、異世界人もいたのかもしれない。

「まあ、それでな。われらも考えたのよ」

サゼエさんは言った。

「人族の王の悪行は止まらぬ。誘拐され、死地に赴かされる異世界人は、今後もいるであろう。」

ならば、異世界人にとって馴染み深い、親しみを覚えるような名を、名乗ってみてはどうかと」

……。

「はあ!?!」

「うむ。じゃからな。われらは、魔王の眷属や、魔王となるのが確実な子どもには、異世界風の発音の名をつけるのよ。慎重に、占つてからな。」

そなたの言う、ハッセ・ガウー・アマーチ力は、力のある芸術家であったようじゃな。わらわたちの世界の占者にも、その力が見

えたのじゃから」

「はあ!?!?」

「ゆえに、わらわは『サザエでございます(サジャー・エイデ・ゴウシャ・ザイ・マルス)』と名付けられ、息子には『タラちゃんです(タラチ・イアンデス)』という名が贈られた」

「はああ!?!?」

あたし、啞然。開いた口がふさがらない。

「え、いや、ちょ、そしたら、魔王さま、え、代々、占って、それで『タラちゃんです』とか言う名前……え、まさか! そしたら、

『イクラちゃん』って名前の人もいますかっ!」

思わず食いついた。

「イクール・アルチ・イアンデスは、わらわの甥じゃ」
「おお! タラちゃんのはとこがイクラちゃん!」

素晴らしい。

「じゃ、ワカメちゃんとか、カツオくんとか!」
「ワールカ・メイチー・イアンデスは、妹じゃ。カイチ・ウー・ウオークンは、弟になる」

なに、そのシンクロ率。

「じゃ、じゃ、フネさんとか、波平さんとか、いますか！」

「フニーエ・スアンデスはわらわの母。ナムール・イーフ・エイは、

」

「お父さんですか！」

「いや、叔父じゃ」

ニアピン。

ちよっと残念。

「うわー、でもすごいシンクロ率……」

どうしよう。変なふうにテンション上がった。

「あ、そしたらマスオさんは？」

「その名前の者は、おらぬのう」

「そうですか……」

気の毒に、マスオさん。いや、別に気の毒でもなんでもないんだ
けどー……

「こつちでも影が薄いのか、マスオさん。あの話でも婿養子状態だったし……ん？」

あれ、そしたら、こつちの占い師さんが優秀だったことで、長谷川町子先生が預言者とか何とか言うことにはならないのじゃ？」

意外でした。後編。

あたしの言葉にサゼエさんは、首をかしげた。

「なぜ、そうなるのじゃ？」

「え、だって。こっちの魔族の人が占って、あたしの世界の、良く知られたマンガの登場人物の名前を、その、見つけてくるんだっただら……」

「トオコ。物事は響き合い、連動するものぞ？」

サゼエさんは、つややかな黒髪を優雅にかきあげた。

「世界と世界は、互いに映し合い、つながりあうものぞ」

「はあ」

「ゆえに、われらが占って見つけた名は、そなたの世界においても預言の元にある名である」

あたしは、首をかしげた。

「よくわかりませんが……」

「力は力と呼ぶ」

サゼエさんは言った。

「わからぬか？ そなたの知るハッセ・ガウー・アマールチ力が偉大な人物であつたからこそ、

われらの世界にその力が響いたのじゃ。

その響きを、占い師は見つけ、引き込んだ。

ゆえに、ハッセ・ガウー・アマールチ力は、預言したとも言えるのじゃ。意識せず、それでいて確実に、二つの世界をつなげたのじやからのう。おのが作品によつて」

「え、……ええく؟؟?」

「わからぬか。したが、そういうものじゃ」

くくつと笑つてサゼエさんは、ミルクティーを一口飲んだ。

「魔法の法則は、あたしにはさっぱりです……」

「力は力と呼ぶだけじゃ。単純じゃぞ？」

「う、ううくん？」

全然わからん。

「ええつと……とにかく！ 異世界の言葉を、代々の魔王さまは名前にしてるんですね？」

「そうじゃ。それで、まあ、悲劇はかなり減つた」

サゼエさんの言葉に、あたしは納得した。そりゃそうだ。『サゼエでございます』とか、『イクラちゃんです』なんて名乗られたら、

思わず止まる。思考とかやる気とか、いろいろ。

「そう言えば、あたしの他にも勇者っていたんですか？」

「何人が会つておるぞ。どうも、そなたと同じ世界とは限らぬようじゃが」

「そうなんですか？」

「うむ。わらわや、妹たちの名に反応せぬ者もおつたのでな。そなたの前に来た勇者は、おそらく同じ世界の者であろうが」

「あたしの前の勇者……」

「三十年ほど前になるか。若い男でな。相手をしたのは、わらわだつたのじゃが……、名乗つた瞬間、泣き崩れられた」

「は？」

「『こんな美女が、サザエさんだなんて……！』と言われてのう。魚をくわえた猫がどのと言つておつたが」

「あゝ……それ、たぶん、あたしと同じ国の人ですね……」

衝撃の度合いがわかる。脳裏に流れたであろうテーマソングも、あたしと一緒にただらう。

「あれ、でも三十年？ そんな前からあのアニメあつたっけ？」

「あちらとこちらでは、時の流れが違つておるようじゃぞ。勇者たちの話をまとめれば」

「あ、そうなんですか？ あやゝ……そういう設定の話あるな、言われてみれば」

むこうの世界で読んだ、異世界トリップもののラノベを思い出し

つつ、あたしはうなずいた。

「まさかの同級生だったり？ いや、それはないか。いきなり行方不明になった同級生とか、いなかったよね……むしろ、あたしが行方不明者……」

あ、ちょっと落ち込んだ。

「いや、すっかりしろ、あたし。ええとサザエさん。それで、その勇者はどうなったんでしょようか」

「会いたければ呼び寄せるぞ」

「呼び寄せ……え、まだこっちで生きてるんですか!？」
「うむ。」

わらわの夫じゃ

………はい？

「シユウ・ゴー・HAMMER・ノウ・レク・サージャ。いろいろあつての、わらわの夫におさまつた」

にっこりと、サザエさんが微笑んだ。

「え、しゅご……修吾さんかな。ハマー・ノウ……浜野？ 夫……え、じゃ、タラちゃんのお父さん？」

「うむ。わが城に住み込んで、あれやこれやと働いておる。ああ、『レク』というのは、婿という意味じゃ。レク・サージャで、わらの婿、ということじゃな。」

シユウゴにはこちらに身寄りがなかったゆえ、わらわが娶る形になつての

「は、じゃあ、えと、いわゆる入り婿……ってことは

あたしは思わずつぶやいた。

「リアルマスオさん」

会いました。

「……と、言うわけで、俺が浜野修吾はまのしゅうごです。前魔王陛下であるサゼエですさんの、夫をやらせていただいています」

三十過ぎに見える、純日本人な顔立ちの男の人が、会釈して言った。あたしは軽く頭を下げた。

「神山透子かみやま とおこです。えっと、浜野さん、あたしと同じ日本人……」

「そうだよ。透子ちゃん……そう呼んで良い？ 透子ちゃんも、衝撃受けたでしょ、魔王の名乗り聞いて」

「ええ、まあ。……」タラちゃんです』って言われたし」

「俺は、『サゼエでございます』だった」

二人して、遠いまなざしになった。

「長谷川町子ってすごいよね」

「そだね。……おれ、タラチが生まれた時にさ。もっとカツコイイ名前にしたかったんだけどさ」

あ。やっぱり、タラちゃんのお父さんなんだ。

「サゼエに晴れやかな顔で、『この子の名前はタラちゃんです！』」

って言われた時には、泣けば良いのか笑えば良いのかって気分になったよ。わかってるんだけどね？ 次に呼ばれる勇者のためだってわかってはいるんだけどね？

でも自分の息子に『タラちゃん』って……!」

こっそり泣きました、と浜野さんは言った。気持ちはわかる。

「えっと、でも、魔王って代々、イソノさん一家の名前になるの？
この先も？」

「この先はどうかかわらないけど……俺の前の勇者のときは、魔王の名前はイソノ家の名前じゃなかったよ」

「へえ？」

「その時は確か、アイムー・ミク・イーマ・ウーシュと、アイムー・ミヌー・イーマ・ウーシュっていう、双子の魔王だった」

「ん〜？」

あたしは首をかしげた。何のアニメだろう。その名前のキャラクターが思いつかない。

「えと、アイムー……？」
「知ってると思うよ、透子ちゃんも。」

ちなみに、その時の勇者は、魔王の名乗りを聞いたとたん、笑いの発作に取りつかれて、どうにもならなくなったらしい。最終的に、『子どものころの友人であるミツキーとミニーに剣を向けるなど、俺にはできない!』と言って、戦闘はチャラになった」

ミッキーとミニーマウズ？

「I・m Mickey Mouse (アイム・ミク・イーマ・ウーシュ)と、I・m Minnie Mouse (アイム・ミニーマウズ・ウーシュ)」

浜野さんが発音してくれた。ああ。

「世界的に有名な、例のネズミたちですか……」

英語圏の人だったらしい。

「召喚される勇者の国に合わせて、アニメのキャラの名前、引っ張り出してるんですか。マジパネエ、魔族の占い師」

そうして、「俺はミッキーマウスだ!」「あたしはミニーマウスよ!」と名乗られた、英語圏の勇者の衝撃も、半端なかっただろう。笑いの発作か。うん、そうだろうね……。

「えーとでも、浜野さん、若いね? 三十年こっちにいるって聞いたけど」

話題を変えると、浜野さんは、ああ、という顔をした。

「あ、それね。ちょっと裏ワザって言うか。俺、今、五十は越えてるんだ」

え。

「来た時、二十六だったから。でも、サザエと一緒にってから、何か起きたみたいで。老化がゆっくりになった」

「へえ……」

「まあ、でも、ありがたいよ。魔族は長命だし。タラチが成人するまで、生きていたかったからね」

「ああ。……良かったですね。タラちゃんも立派な魔王になったし」

そう言うと、浜野さんは、照れたような、誇らしいような顔をした。あ、お父さんの顔だ。

「親の欲目じゃないけど、タラチはがんばってるよね」

「あ、はい。カッコイイです。貫禄あるし。お城の人たちからも、慕われています。評判良いですよ」

「あ、そう？ ふふふ。だって、サザエと俺の子どもだもんね」

「デレデレな顔になってますよ、浜野さん」

ふふふ、とあたしが笑うと、浜野さんは赤くなって、でも嬉しそうな顔をした。

「いや、ほんとにね。タラチは、体が弱くて。熱ばっかりだす子だったんだよ。それが、大きくなって……感慨深いと言っか」

「タラちゃん、体弱かったんだ……」

「うん。サゼエの魔力が強いのに、俺はそうでもなかったから……子どもに影響出たみたいで。でも、ここまで大きくなったんだから、もう大丈夫だよね。」

後は、成人するだけだし」

……え？

「浜野さん、今、なんて言いました？」

「ん？ サゼエの魔力が強いのに、俺はそうじゃない……」

「いや、その後」

「子どもに影響出たみたい？」

「もうちよっと」

「大きくなったから、もう大丈夫……あとは成人するだけ？」

きょんとした顔の浜野さんに向かって、あたしは叫んだ。

「タラちゃんて、成人してないんですか!？」

「まだだよ。だって、あの子、十五歳だから」

なんですと!?

「まさかの年下っつ!?!?!?!?」

衝撃の事実。

魔王さまなタラちゃんは、年下の男の子でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044ba/>

勇者と魔王SS～活動報告小話集2～

2012年1月3日02時47分発行